
和葉の彼氏

舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和葉の彼氏

【コード】

N3456T

【作者名】

舞

【あらすじ】

高校三年生になって二か月、和葉に彼氏ができた。

こんなことになってようやく、オレは自分の和葉への気持ちに気付いた。

和葉の彼氏（前書き）

原作通りの二人です。新一は戻ってきて蘭と付き合っています。

和葉の彼氏

改方学園3年A組。

「和葉、おはよう。今日も山崎君と一緒に来たんや？」

「おはよお、舞。うん。いつも朝迎えに来てくれんねん。」

「そうなんや。でも正直、和葉が山崎君と付き合い出した時は驚いたなあ。服部はもういいん？」

「平次はただの幼馴染やっつていつつも言ってるやろ。」

和葉が登校して来て、いつも通り親友の舞が話しかける。いつもと変わらない光景。

ただ、二週間前から和葉と一緒に登校するのが、和葉の幼馴染の服部平次ではなくなったことを覗いては……。

二週間前から和葉は恋人の山崎大翔ヤマサキヒロトと登校している。

和葉と大翔が付きあい出したのは二週間前。三年になった時に編入してきた大翔が和葉に一目惚れ、告白してOKをもらい付き合い出した。

次の日から、和葉は平次ではなく、大翔と一緒に登下校をしている。

「よお、和葉。今日おかんが和葉に用あるって言よったから、帰り家来いよな。」

「おはよお、平次。ごめん、大翔と行くところあるから……また今度でええ？それかおじさん伝手でお父ちゃんに言つといて。」

「分かった……親父さんに言つとくわ。」

なんやねん、大翔と行くところあるって……この間もやんか……。

っ
て
オ
レ
な
ん
で
イ
ラ
イ
ラ
し
て
ん
ね
や
ろ
？
〵
〵
〵
〵
〵

平次の気持ち

）
）
）
）

「ほい、服部。」

『よう、オレだ。なんか元気ねえじゃねえか、なんかあったのか？』

「ちよつとな……。そや、工藤。もし、ねーちゃんに他に彼氏が出来たらどおする？」

『蘭に彼氏！？そんなのぶつとば……。もしかして和葉ちゃんに彼氏出来たのか！？』

「おう、二週間前にな。なんでか和葉がそいつとおると胸の辺りがもやもやすんねん……。」

『お前まさかまだ気付いてなかったのか！？』

「気付いてないって何をや？」

『お前の和葉ちゃんへの気持ちだよ！まさかまだ子分だなんて言うなよ？』

「オレの和葉への気持ち？なんやそれ？和葉は子分やろ。」

『はあく、じゃあなんで彼女に恋人が出来てもやもやしてんだよ！子分に彼氏が出来たなら、親分としては嬉しいはずだろ？』

「それは・・・嬉しくないな。和葉がオレのものじゃなくなったから・・・。」

『はあく、そこまで分かっててなんで・・・。お前は！』

「オレって和葉のこと好きやったんか・・・。」

『なんだよ突然・・・まあ分かったに越したことはねえな。』

「今更気付いてもな・・・和葉には山崎がおるんや・・・。」

『山崎？和葉ちゃんの彼氏か？でも驚いたな、和葉ちゃんに彼氏なんて・・・。』

「和葉かて彼氏くらい出来るやる。お前はねーちゃんしか見えて無いけど、意外とモテるからなアイツ。」

『そうじゃなくて。彼女が付き合うなら、相手はお前だと思ってたからなあ・・・。』

「なんでオレやねん？」

『お前、彼女の気持ちにも気付いてなかったのか？彼女はおめえが好きだったんだよ！』

「和葉がオレを・・・？そんなはずないわ、現にアイツには彼氏が・・・。」

『彼女、自分の命よりもお前のこと助けようとしてたし、いつもお前のこと最優先に考えてたじゃねえか。彼氏が出来たのは、お前が

いつまでも子分だなんて言うから、愛想尽かされたんだよ！」

「ははは……。今更自分の気持ちなんか気付きたくなかった。和葉の気持ちもな……。」

『服部……。』

和葉のこと

新一との電話で自分の気持ちに気付いた平次。平次は和葉が好きで、和葉の平次が好きだった。でも、その思いが交わることはなかった。
。。。

オレ、和葉のこと好きやったんか。。。それで、和葉もオレのことを好きやったんか。。。思えばいつも和葉は全力でオレに向き合ってくれてたな。。。全身でオレの好きやって言ってくれてたんか。。。今更気付くなんて。。。ほんま工藤の言う通り愛想尽かされても当然やな。。。オレ、これからどないしたらええねん。。。

くくくくく

『おう、工藤か。』

「いきなりだけど、お前諦めちゃうのか？和葉ちゃんの事。」

『おう。諦めるといっつか、しゃーないやろ。オレにどうしようもないわ。』

「略奪だ、略奪！もしかしたら和葉ちゃんまだお前のこと好きかも知れねええだろ？」

『でも最近和葉に避けられてんねん。。。』

「避けられてる？。。。なあ、なんか和葉ちゃんのことが変わったことねえか？」

『変わったこと？特にないけど？』

「そうか。。。じゃあいいんだけどな。」

『じゃあ忙しいからまたな。』

和葉ちゃん、蘭にも彼氏が出来た事言っただけだよね。。。

その上服部のことも避けてる……。なんかおかしくないか？いつもの和葉ちゃんじゃねえみたい……。。

新一は和葉のことで疑問に思うことがあった。

「なあ、蘭。和葉ちゃんから彼氏のこととか聞いたか？」

「うん。少しだけだけどね……。」

蘭の思い

「和葉ちゃんに彼氏がいるって新一に聞いた日にね、電話してみたの……。」

【和葉ちゃん、彼氏出来たんだったってね？おめでどう……。】

【蘭ちゃん……ありがとう。直ぐ言おうと思ったんやけど、その……平次とのこと応援してくれてたから、言い出せんくて……。】

【そっか……。相手どんな人なの？】

【めっちゃええ人やで。かっこ良くて、優しくて。】

【そうなんだ……。】

どうして……。？和葉ちゃんが服部君以外の人と付き合うなんて……。わたしまだ信じられないよ……。服部君のことを聞こうと思って電話したのに、聞けなかった……。和葉ちゃんに服部君のこと好きじゃなくなったって言われたらどうしようって……。

蘭はこの間の電話の内容を新一に話した。

「そっか……。なんか和葉ちゃんに変わった様子なかったか？」

「うん。服部君以外の人と付き合っていること以外は普通だと思うけど……。」

「ならいいんだ……。」

新一どうしたんだろ？やっぱり新一も信じられないのかな？

わたし、新一と付き合えるようになって、次は和葉ちゃんと服部君の番だなって思ってた。それで四人でデートとかできたらなあって……。

わたしの知ってる和葉ちゃんは気が強いけど、優しくて、いつも自分より他人を優先にして、服部君のことが大好きだった。服部君のキラキラした顔が好きだって言ってたのに・・・。

和葉の様子

工藤が言よったけど、和葉に変わったことなんかないよな？オレと登下校せんようになったんは、彼氏がおるからやし。他は・・・？

それからしばらく、平次は和葉の様子を伺っていた。

「舞！次体育やから、着替え行こ！」

和葉は舞を誘って着替えに行った。

特に変わったことはないよな？そや、小日向ならなんか気付いとるかもしれんし、聞いてみよか？

舞に聞こうと平次は放課後に舞を呼び出そうとしていた。

「服部。うち、ちょおアンタに話あんねん。放課後空けといて。」
「おう、オレも聞きたいことあつてん。」

平次が誘う前に舞の方から話があると言ってきた。

話ってなんやろ？オレと小日向の共通の話って・・・やっぱ和葉のことやろな。

それから放課後には直ぐなった。平次は今日一日、和葉のことばかり考えていた。

和葉は迎えに来た大翔と仲良さそうに下校して行った。

舞の怒り

放課後の教室に平次と舞の二人だけ。

先に口を開いたのは平次やった。

「小日向、聞きたいことあるんやけど・・・。」
「その前にうち、アンタに言いたい事あんねん。」

静かだが、凄く怒っているのが舞の雰囲気から平次には伝わっていた。

平次は躊躇いながら聞いた。

「・・・和葉の事か？」

「そうや。アンタ、和葉に何したん!？」

「何って・・・なんもしたらんけど?」

平次はほんとうに思い当たることがなかったからそう言った。

「じゃあなんで!? 和葉山崎君と付き合っとするん? 和葉は服部のことがずっと好きやったんやで?・・・なのに、最近アンタへの態度もおかしいしやん!？」

「それは・・・オレが自分の気持ちをはっきりさせんから愛想尽かされたんや。」

平次の顔が一瞬辛そうだったのを舞は見逃さなかった。

「はぁ、アンタ今頃自分の気持ちに気付いたん?」

「小日向も気付いてたんか？」

「このクラスで服部の気持ちに気付いてないんは和葉くらいやで・・・」

「・・・」

「和葉、最近うちのことも避けてんねん・・・」

平次の疑問

小日向のことも避けてる？

「えっ？今日も一緒に着替え行つてたやんか。」

「それが山崎君と付き合い出してから登下校とお昼はもちろん、休み時間まで山崎君とこやねん……。」

「それはクラスちゃうから、会いたくて会いよるんちゃうか？」

「でもな山崎君の方が教室に来たことないんや。それに山崎君の教室で二人でおるわけでもないんや。」

「ほな二人は何処におんねん？」

「屋上や。前こっそり後ついたら屋上に入つていったんや。」

「屋上？屋上つて」

「ああ！もうこんな時間や！ごめん、また明日！」

舞は慌てて帰ってしまった。

一人残された平次はいろいろとここ二週間の和葉のことを考えていた。

まず、小日向のことを避けとる訳や。喧嘩のしてないのに、避けとるって……。山崎になんか言われたんやろか？

それといつも山崎とおること。でも山崎の方から休み時間は会いに来ない。和葉が会いたいつて言よるんやろか？

ねーちゃんに彼氏が出来た事を言わんかったんは……？

なんか、気になることがいっぱいあるで……。

和葉の行動

平次は一日、和葉の様子を観察することにした。

「舞、おはよお。」

いつも通り大翔と登校して来て、舞に話かける。

そして、一時間目が終わるとすぐに教室を出て行く和葉。

平次は後をつけることにした。

「和葉ちゃん、今日も山崎君のどこ来たんや？いつも仲良くてええな」

「もおつ、からかわんといて！」

和葉が毎休み時間、山崎のどこに来るのはほんまみたいやな。

それから二人で屋上に入って行った。平次も直ぐ後から入る。

和葉が入って来た平次に気付いた。

「平次っ!？」

「和葉に山崎、こんなところで毎日何してんねん？」

「別に、お前には関係ないだろ？」

「和葉、こつちに来い！」

平次は和葉の腕を掴んだ。

「お前、なんのつもりだ？」

和葉の反対の腕を大翔が掴む。

そして、和葉が勢いよく手を振り払った・・・。

和葉の異変

「和葉……。」

振り払ったのは平次の手だった。

「平次、後で説明するから……。今は教室戻って。」
「分かった……。」

小さな声でそれだけ言うと、平次は屋上を出て行った。ほんとは戻りたくなかったけど、和葉のいつもと違う雰囲気からそうするしかなかった。

アイツなんかおかしくないか？いつもと違う。何が違うんやって言われたら分かんけど、とにかく、いつもと違うんや……。

次の休み時間、和葉は話があると平次と舞に言った。

「大翔と屋上に行ってたわけは、好きやからや。屋上が好きやから、行ってただけや。」

「そやけど毎休み時間行かんでも……。」

平次は黙ったままで、舞が疑問に思ったことを言った。

「うん。でもちよつとでも多く大翔とおりたいから……。」

「そうか……。」

「ちよお服部！アンタそれで納得したん？和葉、うちはまだ納得出来んよ！」

小日向が納得出来へんのも無理はないと思った。オレも納得出来へん。やって、和葉が用意されてあった台詞を言ってるみたいなお話し方だったから……。

それから直ぐチャイムが鳴って、三人は席に着いた。

和葉の本音

ごめん。平次、舞ほんまにごめん……。でもアタシにはこうするしかないんよ……。

和葉は平次が出て行った後の屋上で大翔との会話を思い出していた。

【まだ服部と仲良くしてたんだ？】

【ちやうよ！平次とは話してない。勝手に平次が付いて来ただけや。】

【ふーん。ほんとなあ？】

【ほんまやで……。それで、次の休み時間は平次と話してもええかな？】

【駄目だよ。和葉は俺のものでしょうか？】

【でも、平次に怪しまれてるから。】

【分かった。俺の決めた通りに言うんだ。後は聞かれても適当に誤魔化しとけ。】

【ありがとう。】

アタシ、どうすれば良かったんやろ？あの時、直ぐに平次に言えば良かった……？

和葉は誰にも気付かれないように涙を拭いた。

次の休み時間、和葉はまた屋上に大翔と来ていた。

「和葉、ちよつと来るの遅かったんじゃない？何してたの？」

「ごめん。授業のノート書くん時間掛かって。」

「そっか。じゃあ今日は和葉からキスして？そしたら許してあげる。」

「えっ？・・・分かった。」

和葉は大翔にキスをした。

近くに平次がいるとも知らずに・・・。

和葉のキス

平次は授業が終わってもノートをとっている和葉を見て、屋上に向かった。

今なら和葉たちより先に屋上に行けると思ったからだ。

屋上の小屋の上に入り和葉たちが来るのを静かに待っていた。

「和葉、ちよつと来るの遅かったんじゃない？何してたの？」

「ごめん。授業のノート書くん時間掛かって。」

「そっか。じゃあ今日は和葉からキスして？そしたら許してあげる。」

「えっ？・・・分かった。」

声だけ聞こえていたが声がしなくなって下を見たら、和葉と大翔がキスをしていた。

それから平次は周りの音が聞こえなくなった。

見たくないものを見てしまい、頭が真っ白で回らなくなった。

平次はその場で立ち尽くしていた。

くくくくく

それからしばらくして携帯が鳴って気がついた。

時間を見ると、四時間目が始まっていて二人の姿はなかった。

新一からの電話だったが出る気になれず、ほっておいた。

オレ、どないしたらええんやろ・・・？

その日の夕方、平次は静華に頼まれて、和葉の家に向かう。
呼び鈴を鳴らしても誰も出なかったから、合鍵で中に入ると和葉の
靴があった。

和葉の身体

静華に頼まれたものをリビングに置いて、和葉の部屋に向かった。

ガチャッ

「きゃあつ。」

和葉は制服を着替えている最中だった。

「すまん。」

バタンッ

和葉の下着姿見てもた／＼水着姿なら何回の見た事あるのに、なんでこんなドキドキしてんねん！／＼あかん、早よ忘れな・・・。

でも忘れようとするほど浮かんでくる和葉の姿。

「・・・・・・・・ん？なんか和葉の体にあつたような？」

平次はもう一度和葉の姿思い出した。そこで平次は和葉の体の異変に気付く。

ガチャッ

「もう大丈夫やで。」

「ああ、さっきはいきなり開けてすまんかった。」

「ううん。」

いつも通りの和葉。だけど平次はさっき見つけた異変が見間違いないか確かめたかった。

「なあ、和葉。ちよお服脱いでみ？」

「えっ？・・・何言ってるの？」

「ええから脱げって！」

平次は和葉を無理やり押し倒して、服を捲り上げた。

「いやっ・・・なにするん！？やめ」

「なんやねん。これ・・・。」

和葉は平次から目を逸らして黙ってしまった。

「この痣なんやっけて聞いてんねん！」

和葉の脇腹には痣があり、その痣に平次が触れた。

「躓いて机にぶつけた時になっただけや。」

「ぶつけたって・・・ほんまなんか？」

和葉は無言で頷いた。

和葉の態度

「そろそろのいてくれん？」

「ああ・・・すまん・・・。」

和葉に冷めた目で見られ、平次は我に返って和葉の上からどいた。

「なんか用あつたから、来たんやろ？」

「ああ、おかに頼まれてな。」

「じゃあもう用すんだんや？・・・やったら帰って。」

「オレ、お前に話あんねん。今時間あるか？」

どこか冷めた和葉の態度が気になったが、平次は本題に移そうとした。

「ごめん、無理。」

「ほなまた来るわ。」

「無理や。いつ来られても無理・・・。」

「なんでや？」

「無理なもんは無理なんや！もお用済んだんやろ？帰って！」

平次は和葉に部屋から追い出されてしまった。

しゃーないから帰ることにした平次だが、頭の中は和葉のことについてばいやった。

いつも和葉やったら顔を真っ赤にして怒ったはずなのに、なんやねんあの態度は・・・！冷めた目えで見てきやがった。ほんま・・・愛想尽かされてもたんやろか？

それと、あの腹にあった痣・・・ほんまにぶつけて出来たんやろか
？和葉鈍くさい奴やからな・・・でもあんな殴られたみたいな・・・
・・・まさか山崎に・・・。

平次は嫌なことを考えたが、止めた。

そんな奴やったら直ぐに別れてるわな・・・。

和葉の涙

「ごめん……。ごめんな。平次……。。」

和葉は平次の帰った後、部屋で声を殺して泣き続けた。

和葉は「帰って」と言ったあと、平次が一瞬悲痛な表情をしたのを見ていた。

ごめん、でも今は平次に気付かれるわけにはいかんねん。

和葉は平次に触れられた痣のある辺りを触った。

翌日

今日も和葉は大翔と屋上に来ていた。

「きゃあああつ!!」

「和葉っ！大丈夫か!？」

二人が教室に戻ろうと階段を下りている途中で和葉が足を滑らせて階段から落ちた。

「和葉！おい！しっかりしろ!!」

「なんか悲鳴聞こえたけど、なんかあったの?」

女子生徒二人が様子を見に来た。

「和葉ちゃん!?!大丈夫!?!誰か救急車呼んで!!」

和葉は救急車で病院に運ばれた。このことは直ぐに平次と舞の耳にも入った。

平次は教えてもらった病院に急いで行った。

案内された病室には大翔もいて、和葉と医者のお話を聞いていた。平次が入ると和葉が一瞬驚いた顔をして俯いた。

「じゃあ俺は学校戻るね。」

「うん。ありがとお。」

医者のお話が終わると、大翔は出て行った。

和葉の反応

平次と和葉は病室に二人きり。気まずい空気が二人の間に流れる。

「ほんま鈍くさいやつぢやな。階段から足踏み外すなんて。」

重い空気を換えようと、平次はわざといつも通りの嫌味を言った。本当は和葉のことが心配で息が詰まりそうだったのに・・・。

「・・・嫌味言いに来たん？やったら」

「ちやう！・・・心配やから来たんや。」

和葉の反応はいつもと違って、冷めたものだった。やから平次は慌てて否定した。

いつもの和葉やったら言い返してくるのに・・・。

「・・・」

「怪我、痛くないか？ほんまお前は危なっかしいんやからな。」

「やつ・・・」

平次が和葉の頭に触れようと手を伸ばしたら、和葉はビクっとなつて俯いた。

「和葉・・・？」

「あつ・・・。ははははは・・・。」

和葉は平次の方を笑いながら見上げた。でも平次には無理した笑い声にしか聞こえなかった。実際に和葉も無理していたのだが・・・。

今、オレの手に恐がったよな？今も怯えとる顔しとるし……まさか！

「和葉……ほんまに落ちたんか？」

「何が？」

「やから！ほんまに階段から落ちたんかって聞いてんねん！」

「……うん。それ以外に何かあるん？」

「山崎に……突き落とされたんとちゃうんやな？」

「そんなことあるわけないやん……。」

平次の方から表情が見えないように顔を背けて言った。

「ならこつち見て、オレの目え見て言え！」

和葉を無理やり自分の方に向かせる。

「和葉……。」

和葉の嘘

和葉の顔は今にも泣きそうになっていた。

「和葉、ほんまの事言ってくれ。。。」

平次は和葉を抱きしめていた。

「平次。。。。。」

アタシ、どうしたらええ？平次。。。。。

「なんのこと？ほんまの事って？アタシは足滑らせて落ちただけやで？」

やっぱり、平次には言えない。。。。。

「ほら、アタシ鈍くさいやん？やから。。やからな。。。。離して？」

「和葉。。。。。」

平次は和葉を解放した。和葉の顔を見ると、いつもの笑顔があった。

「平次、学校戻らんでええん？」

「ああ。。。。。」

和葉がなんも言わんのやから、信じてやりたいけど。。。。オレは今の和葉を信じることは出来ん。今の和葉は絶対嘘吐いてる。

「ほな、帰るわ。」

「うん。」

平次にまた嘔吐してしもた。

ほんまはな・平次の言うた通り、大翔に階段から落とされたねん・
・。

和葉の秘密

改方学園、屋上。

【和葉、昨日家に服部が来ただろ？】

なんで大翔が知ってんの？誤魔化さな・・・。

【えっ？来てないよ。平次がくるわけ】

大翔がポケットから何かを取り出した。

【ガチャツ きゃあつ。・・・すまん。ボタンツ ・・・

・・・ガチャツ もう大丈夫やで。ああ、さつきはいきなり開けてすまんかった。ううん。・・・なあ、和葉。ちよお服脱いでみ？・・・えっ？・・・何言ってるの？ええから脱げて！・・・】

大翔が取り出したのは一つの機械。そこから聞こえるのは平次と和葉の声。

【なんで・・・？】

【和葉の鞆に盗聴器仕掛けてたんだ。気付かなかった？】

【!？・・・】

【信じられないって顔だな。でも俺も驚いたよ、盗聴器を仕掛けたその日に服部が来るんだから。・・・服部に何かされたか？・・・黙ってたら分からないだろ？】

和葉は何も答えなかった。

【はぁ、痣のことばれちゃったね？】

【それは、誤魔化したから・・・！】

【あんなので服部が誤魔化せるとでも思ってるの？】

和葉はまた黙ってしまった。

【服部の事、どうしよっかなあ？】

【平次になんかするんはやめて！】

【・・・考えとくよ。】

この後、教室に戻る途中で和葉は階段から落とされた。

大翔の本性

大翔は病院の帰り、和葉のことを考えていた。

和葉はほんとバカだよな。バカで凄く可愛いよ。惚れた男の為に好きでもない男と付き合って、見てて可哀想なくらいだぜ。

でも、服部とは関わるなって言ったのに関わるから……だから俺が突き落としてやったんだ。

【やから！ほんまに階段から落ちたんかって聞いてんねん！！】

【……うん。それ以外に何があるん？】

【山崎に……突き落とされたんとちゃうんやな？】

【そんなことあるわけないやん……。】

そうやって服部に嘔吐してればいい。それでももっともっと苦しめ。

それで、ずっと俺のものになってればいいんだ。

大翔の提案

一人で病室に居た和葉のもとに、一通のメールが届いた。

【契約違反の和葉には、罰が必要だね？】

一瞬で和葉の表情が凍りつく。

〃 〃 〃 〃

「もしもし？」

『メール読んだ？和葉、服部に最期の挨拶をする時間をあげるよ。』

「平次に何するつもりなん！？」

『言ったらお楽しみがなくなっちゃうだろ？』

「平次に手え出すんはやめて！・・・なんでもするから・・・。」

『ふん。・・・じゃあ俺と寝よっか？』

「えっ・・・。。。」

『出来ないの？』

「・・・。。。」

『まあ、俺は別にいいけど・・・折角、大好きな平次君を救えるのにね。』

「・・・分かった。・・・その代り平次にはなんもせんとして！」

『いいよ。明日俺の部屋に来るの、待ってるから。』

和葉の覚悟

大翔としたら平次には手え出さんって言ってくれたけど・・・大翔としてしたら、もう平次とは会えんね・・・でも、平次を守れるならええんや。

和葉は一人で覚悟を決めていた。

あの日、大翔と出会わなければ、アタシと平次どんな関係やったかな？付き合ってたかな？幼馴染のままやるか？
幼馴染のままでもええ、大翔に出会う前に戻りたいよ・・・

三ヶ月前

大翔が改方学園に転校してきた。和葉と平次とは違うクラスだが、大翔のことは和葉たちのクラスでも話題になっていた。改方学園の編入試験を突破した成績の持ち主で容姿もいいとなれば女の子はほっておかないだろう。でもその大翔が目付けたのは和葉だった。和葉の方は噂を耳にはしていたが大翔に興味はなかった。

そんなある日、平次と和葉がいつもの痴話喧嘩をしているところを大翔が目撃した。

【あの服部平次がいるのは知っていたけど、まさか遠山和葉の幼馴染だったとはな・・・】

それから暫くして、大翔は和葉を呼び出した。

【遠山さん、俺と付き合おうよ。】
もちろん和葉は好きな人がいるからと断った。すると急に大翔は和葉を抑えつけて、無理やりキスをした。和葉は直ぐに突き飛ばして、逃げようとした。

【平次……。】

その時とつさに平次に助けを求めて名前を呼んだ。、その途端、大翔の顔色が変わった。再び和葉にキスをする。

【……や……。】

【遠山さんの好きな奴って服部平次でしょ？俺とキスしたこと彼に言ったらどうなるかなあ？】

和葉は押さえつけられたまま……。

【えっ……？】

【きつと嫌われちゃうよ。】

【そんな……！】

【黙っててあげるから俺と付き合おうよ？】

【そんなん】

【出来るわけないって？……じゃあ服部には死んでもらうかな……。】

【えっ？】

和葉の理由

その後聞かされたのは、大翔の家は大きなやくざの家ということ。平次や和葉を殺すのも簡単。大翔と付き合つて、平次と関わらないようにし、誰かに言ったのが分かつたら平次に危害を加えると言う。和葉は直ぐに大翔の話に頷いた。

【付き合うから、平次にはなんもせんとして！】

その日以来、和葉は大翔と常に一緒にいるようになっていた。平次のことも避けて、関わらないようにしていた。

でもそれが平次に不信感を抱かせていたとも知らずに……。

和葉にとって大翔の言うことは絶対で、逆らえばどうなるかは想像するのも嫌だった。

平次になんかあつたら……アタシは耐えられへん。アタシが大翔の言うこと聞いたてたら何もせんて言つてくれた。やつたらアタシは大翔の言うことを聞こう……そう思った。

でも……ほんまはしたくないよ……。

……誰か助けて……。

来てほしくない時ほど、明日は早く来る。

遂に大翔の部屋に行く日が来てしまった。

もう、覚悟は決めつつもりやつたんやけどな……。

手や足が震えてしまう……。行きたくないよ……。平次……。

それでも自分を奮い立たせて玄関に向かった。ドアを開けて一番に目に入ったのは……。よく見た事のある帽子だった。

平次の勸

「……………平次……………」

「おう……………お前どっか行くんか？」

「ちよつと舞のどこ……………」

平次の顔を見ると頑張つて抑えてた涙が出てしまいそうだった。だから早足で平次の前を通り過ぎた。

「ちよお待て……………」

でも平次に捕まってしまった。

「何？急いどるんやけど……………」

「ほんまは小日向んところ行くとちやうんやろ？」

「えつ……………」

「山崎のそこには行くな！」

「……………何言よるん？舞のどこやって！」

「嘘吐くな！！……………何処の世界に好きな女に守ってもらつて喜ぶ男がおんねん？」

「……………」

「小日向に聞いたで、お前が病院で誰かと電話してたつて。オレに手え出すんはやめてつて言つてたつて。今のお前がそんなん言つん山崎くらいやろ！」

「ちやうよ……………舞何勘違いいてんねやろ？」

「和葉……………頼むからほんまのこと言つてくれ……………」

平次は凄く辛そうな顔をした。

「平次……。」

「和葉……オレやと頼りにならんか？」

和葉は平次に抱きしめられた。

和葉の気持ち

和葉はもう駄目やと思った。平次に気付かれたからではなく、もう平次に嘘を吐きたくないと思ったから。平次の辛そうな顔をもう見たくないから。。。

「平次……………助けて……………」

和葉を平次は優しく抱きしめた。

「最初つからオレに言えばええのに……………でも一人でここまでよお我慢したな……………。直ぐに気付いてやれんでごめん……………」
「平次は悪ないよ。アタシがもつとしっかりしてれば……………」

平次は和葉をきつく抱きしめた。

「これからはオレが守るから。」

「平次……………」

平次は和葉を解放し、二人は見つめ合った。

「和葉……………」

「和葉、俺んち来ないで何やってんの？」

「大翔……………」

平次の危機

「服部さあ、人の彼女に手え出すなんて・・・何考えてんの？」
「お前こそ何考えとんや？和葉脅してたんは分かってんねん！」
「へえ〜和葉喋っちゃったんだ？」

大翔が和葉に近づくと、和葉が怯えだした。平次は和葉を自分の後ろに隠す。

「和葉は俺のものだ。返してもらおうか。」
「和葉は誰にも渡さん!!！」

大翔がポケットからナイフを取り出した。

「退かないなら刺しちゃうよ？」

「ははっ・・・刺したいなら刺せえ。でも和葉は渡さんで!!！」

「平次・・・!!！」

「ふ〜ん。じゃあ遠慮なく。」

「平次！アタシ大翔のとこ行くから、退いて！」

「何言うてんねん！好きな奴守れんかったら男ちゃうやろ!!！」

どうしよお・・・このままやと、アタシのせえで平次が・・・。

和葉の目にあるものが写った。

和葉の手

和葉の目に入ったのは、玄関にかけてある一本の傘。

ほんまは竹刀があつたらええんやけど・・・平次なら傘でもいけるかな？

でもどうやって取るう・・・ここやと手伸ばしたら大翔から見えてしまうし・・・。

だんだん大翔は平次たちの方へ近づいていた。

どうしよう・・・早く何とかせな・・・！

和葉はもう大翔にばれてもええからと思ひ傘に手を伸ばした。

和葉の動きに気付いていたが、大翔はゆっくり歩いてくるだけだった。

平次に傘を渡す。

「平次、これ！」

「おう！」

和葉から傘を受け取ると、直ぐに平次が傘を大翔に向かって振り下す。

バシッ

だが、大翔が傘を掴んでそのまま平次から奪った。

「残念・・・俺も剣道してんだよね。」

平次の策

大翔はその場に、傘を捨てた。

「和葉返してくれれば何もしないよ?」

「平次……!」

「はぁ……。じゃあカウント10で刺します。」

「平次……。離して!アタシが」

「10……。」

「黙つとけ!」

平次は和葉の手を離さなかった。

なんか、和葉だけでも逃がす方法はないんか?

「9……。」

大翔はだんだん近づいてくる。

「平次……。!」

「8……。」

「和葉……。オレが山崎の方行くから、お前その間に家の中入れ!」

「7……。」

「平次は?」

「オレはいける……。」

「6……。」

「そんな……。嫌や!」

「5……。」

「オレの言つと通りにせえ!」

「4・・・。」

「分かった・・・。」

「3・・・。」

平次が大翔に近づきナイフを奪おうとした。その間に和葉は家の中に入る。

「お前・・・!!」

大翔が切れて平次にナイフを向ける。

「・・・うっ・・・。」

平次の声

和葉の耳に平次の声が聞こえて家に入るのを止めた。

「平次！」

平次の腹部からは血が出ていた。

「か・・ずは・・。お前・・。逃げろ・・。。」

「平次！しっかりして！」

「あゝあ・・。ほんとに刺さっちゃた・・。。」

大翔が救急車を呼び、和葉を連れて行こうとした。

「離してっ！」

「和葉の力じゃ俺に敵わないのはもう分かってるでしょ？」

和葉が、大切な人が連れて行かれるのを、オレは見てるだけなんか・
・？

平次は立ち上がり、大翔が捨てた傘を手を取った。そして、大翔に向かつて振り下す。だが、ふらついて傘は和葉めがけて振り下された。

和葉の盾

和葉に当たると思ったが、振り下すのを止めることは出来なかった。

バシッ

平次は目を瞑った。

「きゃあっ・・・！」

平次が目を開けると、大翔が自分を和葉の盾にしていた。

「山崎・・・。」

「和葉、大丈夫？」

「えっ？・・・うん。」

大翔に守られて戸惑いを隠せない和葉。

そこに救急車がやって来て、平次は病院に運ばれた。

その間に大翔は何処かに行ってしまった。

病院に着いて直ぐ、平次の手術は終わった。

「平次・・・。」

和葉は凄く安心して、やっと笑顔を見せた。

なんちゅー顔するんや／＼・・・抱きしめたい・・・ってあかん、あかん。今は山崎のことが先や！

「和葉・・・山崎は？」

「何処行ったか分からん・・・。」

「そうか・・・。」

「ごめんな・・・？」

首を傾げるな！／＼／＼・・・ちゃんと好きやって言っなら今かな？

「・・・なあ、和葉」

「よお、服部！」

「工藤！？ねーちゃんまで・・・。」

はあくせつかく告るうとしたのに・・・。

新一の勘

「山崎大翔なら警察に連れて行つたよ。」

「なんで工藤が知ってんねん？」

「ちよつと和葉ちゃんが気になって、いろいろ調べたんだ。アイツ東京じゃ有名なでつけ病院の跡取りなんだよ。」

「そやつたんか……。」

「えっ……？病院？やくざやなくて？」

「やくざ？」

「うん。大翔の家やくざの家系やって……。」

和葉が新一の方を振り返つたが、顔を見て直ぐに目を逸らした。

「和葉ちゃん……？どうかした？」

新一は和葉が自分を恐がっている気がした。

「ううん……。なんでもないよ……。」

平次は直ぐにその原因が分かった。

「山崎はお前に似とるからなあ。その気取つた東京弁も一緒やし……。」

「そうか？……別に気取つてねえし……。」

「ごめんな……。工藤と大翔はちやうつて分かつてるんやけど……。」

「いいよ。ただあんまり大翔って呼んでると、服部の機嫌が悪くなるけどね。」

「へ……？なんで？」

「なんでって……服部まだ言っ
て無かったのか!？」
「言うには言っ
たんやけど……。」

平次は顔を背けた。

「しゃーねえな、二人きりにしてやるか。」

「蘭、ちょっと喉渴いたからなんか買っ
てこようぜ。」

「うん。」

「服部、ちゃんと
言っ
んだぜ?」

新一は平次にだけ聞こえるように言った。

「なっ!さっきお前が入っ
て来んかったら言えてたわ!」

「八つ当たりすんなって!」

平次の告白

病室に平次と和葉、二人きり。

緊張でいっぱいな平次と、新一の言った意味が分からずに悩む和葉。

「なあ、平次？」

「な、なんや？」

「なんでそんなにかしこまっとるん？」

「いや、やつぱりこういうんはちゃんとした方が……。」

「えっ？ほんな小さい声でぶつぶつ言つても聞こえんで？」

和葉が平次に近づき、ベッドの縁に座った。

「なっ／＼近寄りすぎや……／／／」

「やって平次なんて言よるか聞こえんもん。」

「じゃあ一回しか言わんからよう聞けよ？」

「う、うん……。」

平次が急に真剣な顔をしたから、和葉も緊張する。

「オレ、和葉のこと……好きや／／／」

「……。」

和葉は黙り込んでしまった。

和葉の告白

平次は和葉の気持ちが知りたくて、催促した。

「和葉は？」

「……………アタシも好きやで？平次のこと。」

和葉を抱きしめようとしたけど、するりと逃げられてしまった。

「和葉？」

「でも、アタシは大翔と……………キスした。何回も何回も……………」

「和葉……………」

和葉は唇をゴシゴシ拭きだした。

「やめろ、和葉！」

平次が手を掴んで止めた。

「何回拭いても、歯磨きしても消えんねん……………。気持ち悪くて、
恐くて……………」

和葉は泣きながら言った。

「和葉……………」

「やから……………」

「和葉、こっちおいで？」

和葉は首を横に振った。

「ええから、来て？」

平次は和葉の手を引いた。

「アイツと何回もしたんやったらオレがその二倍でも三倍でもしたるから。もう忘れるよ？」

「うん……。」

二人はキスをした。

その様子を新一と蘭はドアの隙間から見ていた。

新一の心配

「良かったね、二人が上手くいって。」

「そうだな……。」

「どうしたの？新一嬉しそうじゃないね？」

「いや、和葉ちゃん大丈夫かなって……。」

蘭は何を言っているか分からないという顔をした。

「ほら、周りの奴らがなんか言い出すかも知れねえだろ？和葉ちゃんの彼氏が山崎から服部になったんだから。」

「そっか、和葉ちゃんと山崎君の仲は学園公認だったみたいだしね……。」

「和葉ちゃんがいろいろ聞かれて辛い思いしないといいけど……。」

「それは大丈夫よ、今度は服部君がついてるから！」

「そうだな……蘭、おめえは一人で抱え込んだりするなよ？」

「うん……。」

二人は見つめ合い……キスを

ガラッ

「なぐにいちやこいとんねん！」

平次がドアを開けて二人のキスを阻止した。

「おめえだって和葉ちゃんとキスしてただろ！」

「なっ！／＼／＼工藤覗いつとたんか！？」

「別にいいだろ？減るもんじゃねーし！」

言い争う二人をよそに、和葉と蘭はだんだん顔が赤くなっていく。

蘭ちゃんと工藤君にキスしてんの見られてたなんて・・・／＼／

キスしようとしたの服部君にばれてたなんて・・・／＼／

和葉の真実

翌日、平次と和葉は平次が刺された状況を説明するために、警察に呼ばれていた。

「へえちゃん、早速やけどの山崎大翔のこと詳しく話してくれるか？」

「アイツは和葉を脅して自分の彼女にしてたんや。」

「和葉ちゃんを!?!」

大滝が見ると和葉は俯いていた。

「ああ、ほんでオレとは関わるなって言うて、監視状態やったんや。」

「監視？」

「休み時間とか誰とも話せんように自分のところ呼んで、来んかったら……階段から突き落としたんや。」

「ええっ!……そんな……。」

「それでオレが和葉ん家に行ったら山崎が来て、和葉返さんかったら刺すぞって言われて刺されたっちゅーわけや。……まあオレは詳しいことは分らんけど……。」

平次は和葉の方を見たが俯いたままだった。

「そうか……。」

「……初めはな……付き合ってくれて言われたんよ……。」

「和葉……。」

「ほんで断ったら……キスされて……このこと平次に言った

らどう思っかなって言われて……。言わんかわりに付き合おう
って……。でも……。断ったら、家がやくざなんやっって言
われて……。平次殺すって言われて……。

「やくざ？山崎大翔の家は病院……。」

「嘘吐いてると思わんかって……。それから……。平次に喋らん
ようにって、ずっと大翔とおった……。それで……。平次が家
に来たんがばれて……。階段から落とされた……。」

「なんでアイツ、オレが来たって分かってん？」

「盗聴器や……。」

「盗聴器！？和葉ちゃんに？」

「鞆に仕掛けてたって言うてた。」

「……。なあ？山崎と話出来んやろか？」

大翔の本心

大滝に頼んで、大翔と話が出来るようにしてもらった。もちろん平次と大翔の間には透明の壁がある部屋で、大翔側には大滝が付いていた。

「俺になんか言いたいことでも？まあ、言いたいことだらけだろうな。」

「お前和葉に家がやくざやって言うて、脅してたんやろ？」

大翔は笑いながら話し出した。

「はははっ．．それ？和葉バカだよな。やくざでも人殺せば捕まると。第一、普通は信じないでしょ？家がやくざなんて話。」

「．．．．和葉は人を疑うことが嫌いなだけや。」

「なにになに？彼女のこと庇ってんの？良かったね、和葉もお前のことが大好きみたいだよ？だって俺とキスしたことお前に言えば嫌われるよって言ったたら、泣きそうな顔するんだもん。でも和葉のあの顔ってすげーそそるよな？」

「．．．．．。」

「あれ？お前見た事なかった？残念。和葉はキスの後、泣きそうな顔するんだよ。その顔見ると俺がもつと苛めたくなるって気付いてなくってさ。」

「．．．．．。」

「和葉は俺の言うことならなんでも聞いたよ。俺がお前と関わるなって言えば関わらないし、キスしろって言えばキスするし。ほんとバカな女だよ。そういえばお前回屋上で俺たちのこと見てただろ？どうだった？好きな女と他の男のキスを見た感想は？はははっ．．

「．．。」

「でも和葉があんなことしてたのは全部お前の為だぜ？大好きな平次君に危害が及ばないように。大切な女に守ってもらって、自分分は彼女が傷付いてるのも気付かずに。お前、最低だな。」

平次は手に指が食い込むくらい手を握り締めて、耐えていた。本当はもう二度と口がきけなくなるくらい殴ってやりたいけど……。大滝はそんな平次の様子に気付いていた。

「へえちゃん、もう」

「山崎、和葉のこと好きやったんやろ？」

「はあ？……まあ好きだったよ。あんな思い通りになる女いないし。」

「嘘やろ？ほんまは本気で和葉に惚れてたんやろ？」

「……。」

「オレの傘が和葉に当たりそうになった時、お前和葉の盾になったし。和葉に手え出さ

んかったんやろ……？」

「……惚れてたよ、和葉に……。ほんと和葉の笑顔が好きだった。……まあオレは笑顔に出来なかつたけどな……。」

「山崎……。」

平次の願い

「なあ大滝はん。山崎の罪出来るだけ軽くしてくれんか？出来れば無罪に……。」

「でもへえちゃん、それやと和葉ちゃんが……。」

「和葉にはオレが言うから、それに和葉とは二度と会わせん。」

「分かった、任しとき。」

「おおきに。」

山崎は人に愛されたことがないんやと思う。やからきつと自分もど
うしたらええんか分からのやと……。

まあオレは許すつもりはないけど、外に居る方がアイツは真っ直生
きられると思うから……。

「和葉。山崎のことやけどな、アイツを無罪にしたい。」

「……うん……。」

「和葉は恐いかもしれんけど」

「いけるよ？やって平次が居ってくれるやろ？」

和葉は平次に笑顔を見せた。

「ああ……。」

この笑顔をアイツも……。

平次は和葉を引き寄せ抱きしめた。

「い、いきなり何？／＼」

「別に……。」

「別について／＼」

出来ればこれから先の未来、この笑顔が消えないようにと、平次は
心の中で願った。

和葉の彼氏（前書き）

これで最後です。次は遠距離編書きます！
読んでくれてありがとうございます。

和葉の彼氏

大翔は京都の親戚の家に行くことになった。

「和葉、山崎が京都に行くことになったって……。いけるか？」
「全然！平次が居ってくれたらアタシ、怖いものなんかないよ！」

和葉の笑顔を見て平次も安心した。和葉の笑顔を見ると自然と平次の顔も緩む。

二人は見つめ合い、笑いあった。

「平次、ありがとう」

「ん？なにが？」

「いろいろと……。ありがとうな？」

「じゃあお礼に……」

「駄目やで！」

「オレまだ何も言うてないで！」

「やって平次絶対やらしいこと考えとるもん！」

「まあ、考えて……。つてなんやと!!！」

「ほんまに考えとつたん!？」

「まあええやん、彼氏やし？」

「うん。……。また今度な」

和葉はいたずらっぽい笑顔を見せた。

これから先、和葉の彼氏はずっとオレだけやで？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3456t/>

和葉の彼氏

2011年9月4日19時14分発行